

宇都宮市埋蔵文化財報告第14集

聖山公園遺跡Ⅱ

—昭和58年度発掘調査概要—

昭和59年3月

宇都宮市教育委員会

発刊にあたって

宇都宮市営聖山公園(市営第2聖山)建設に伴う同名遺跡の発掘調査は、今年度で第2か年目の調査を終了いたしました。

発掘調査は、昨年度に引き続き約1haの面積を対象に実施いたしました。昨年度同様、古代人の生活の跡である住居跡や墳墓等を多数検出することができましたが、なかでも当時の信仰生活の一端を偲ばせる子持勾玉の出土は、県内でもたいへん貴重な例となりました。

この度、今年度(昭和58年度)の調査成果のあらましとして本書を刊行いたしました。各方面で活用され、郷土の古代史解明の一助となれば幸です。

本文になりましたが、調査にあたり終始御教導いただきました栃木県教育委員会文化課、栃木県立博物館、栃木県文化振興事業団の各指導機関及び指導委員の国土館大学教授大川清先生・専修大学教授久保哲三先生・宇都宮市文化財保護審議委員会委員塙静夫先生・小堀時藏先生に対しまして厚くお礼申しあげます。

なお、聖山公園遺跡の調査は、来年度以降も引き続き実施いたします。上記の各機関各位をはじめとして関係する方々の一層の御指導、御支援をお願い申しあげます。

昭和59年3月31日

聖山公園遺跡発掘調査団長

宇都宮市教育委員会教育長 後藤一雄

例　　言

- 1 本書は、昭和58年4月～同年12月に実施した宇都宮市上久町に所在する聖山公園遺跡（宇都宮市営第2墓園造成地）の発掘調査概要報告である。
- 2 発掘調査は、宇都宮市教育委員会が主体となり、次頁に示したとおりの調査組織に基づき実施したものである。今回は第2次調査であり、今後も継続して調査を実施する予定である。
- 3 遺構・遺物の整理・実測等は、金田信夫、富川努の協力を得て、梁木誠がこれにあたった。また、遺物写真撮影に際しては栃木県立博物館橋本澄朗・上野修一両氏の御指導を得た。記して感謝の意を表する。
- 4 本書の執筆は、定岡明義、木村光男、手塚英男、梁木が、編集は梁木がこれにあたった。
- 5 子持勾玉に関しては、橋本澄朗氏の御研究成果を掲載させていただいた。氏の御厚意に深く謝意を表する。
- 6 発掘調査中、市民生活課・今井操、黒崎民雄、福島重文、公園緑地課・大森功壹の各氏には種々の御協力を得た。記して感謝の意を表する。

凡　　例

- 1 本文に使用した実測図は、原則として住居跡は1/60、カマドは1/30、土器は1/3に縮尺を統一した。
- 2 土器実測は、土師器断面を白ヌキ、須恵器断面を黒ぬりとした。
- 3 土器説明の法量は、上から口径、器高、底径とし、丸底のものには●（○は推定）を付けた。法量値は、単位がcmで、不明をー、推定を（　）付きで示した。
- 4 住居跡実測図中および写真図版中の土器番号は、土器実測図中の番号に一致させた。
- 5 実測図中の標高の単位は、総てmである。

〔調査組織表〕

●調査団組織



●昭和58年度調査団

團長	教育長	後藤一雄	指導機関	栃木県教育委員会文化課
副團長	教育次長	田中敏夫		栃木県立博物館
事務局長	社会教育課長	加藤悦男		栃木県文化振興事業団
事務局次長	文化振興係長	安達光政	指導委員	国士館大学教授 大川 清
事務局員	文化振興係	定岡明義		専修大学教授 久保哲三
(調査員)	々	木村光男		市文化財保護委員 堀 静夫
	々	手塚英男		小堀時蔵
	々	柴木 誠	参与	民生部長 荘司利明
				都市開発部長 福田泰久
			幹事	市民生活課長 水沼力男
				公園緑地課長 斎藤亨二
調査員補	市文化財調査員	松本笑悦	調整担当	市民生活課 森田 勇
		金田信夫		々 中島善光
		富川 努		々 黒崎民雄
				々 小森健久
				聖山公園管理事務所 今井 操
				々 福島重文
調査補助員	安生サキ	安生ミカ	小林ミキ	小林マサ 齋藤イク
	佐藤正男	島崎熊夫	福田カネ	福田タイ 福田タイ
	堀田一夫	渡辺フミ	松本恵美子	松本和子 松本トシ
	松本トリ	味野和ツ	森ヒロ子	谷中一郎 山崎トキ

目 次

- 発刊にあたって
- 例 言

I 調査の経過

1 前年度(昭和57年度)の調査概要.....	1
2 本年度(昭和58年度)の調査.....	
(1) 調査計画.....	3
(2) 調査地区.....	3
(3) 調査経過.....	5

II 検出された造構と遺物

1 住居跡と出土遺物.....	
(1) 10号住居跡.....	9
(2) 11号住居跡.....	14
(3) 13号住居跡.....	17
(4) 14号住居跡.....	24
2 子持勾玉.....	31
3まとめ.....	31
付 栃木県内出土の子持勾玉.....	33

挿 図 目 次

第1図 聖山公園遺跡位置図.....	2
第2図 聖山公園遺跡発掘調査区域.....	4
第3図 聖山公園遺跡周辺遺跡分布図.....	6
第4図 聖山公園遺跡造構配置図.....	7・8
第5図 10号住居跡実測図.....	10
第6図 10号住居跡カマド実測図.....	11
第7図 10号住居跡出土遺物実測図(1).....	12
第8図 10号住居跡出土遺物実測図(2).....	13

第9図	11号住居跡実測図	15
第10図	11号住居跡カマド実測図	16
第11図	11号住居跡出土遺物実測図	16
第12図	13号住居跡実測図	19・20
第13図	13号住居跡カマド実測図	21
第14図	13号住居跡出土遺物実測図	23
第15図	14号住居跡実測図	25・26
第16図	14号住居跡カマド実測図	27
第17図	14号住居跡出土遺物実測図(1)	28
第18図	14号住居跡出土遺物実測図(2)	29
第19図	子持勾玉周辺出土土器	31
第20図	聖山公園遺跡出土子持勾玉	32
第21図	栃木県内出土子持勾玉集成図	33
第22図	栃木県内出土子持勾玉分布図	35

図版目次

PL 1	(1) 11～13・15号住居跡遠景	(2) 10号住居跡全景
PL 2	(1) 10号住居跡貯蔵穴	(2) 10号住居跡カマド
PL 3	(1) 11号住居跡全景	(2) 11号住居跡カマド
PL 4	(1) 13号住居跡全景	(2) 13号住居跡カマド
PL 5	(1) 14号住居跡全景	(2) 14号住居跡貯蔵穴
PL 6	(1) 14号住居跡カマド	(2) 14号住居跡カマド支脚
PL 7	住居跡出土土器(1)	
PL 8	住居跡出土土器(2)	
PL 9	住居跡出土土器(3)	
PL 10	住居跡出土土器(4)	
PL 11	住居跡出土土器(5)	



遺跡見学会風景（昭和58年7月）

I 調査の経過

1 前年度（昭和57年度）の調査概要

昭和57年度は藍藻墓地の造成計画に基き、第1次造成地区である台地南西緩斜面沿いの一隅及び靈園への導入路にかかる1・2号墳と経塚について(第2図参照)発掘調査を実施した。検出された遺構は、上記2基の古墳と3基の経塚以外に9軒の竪穴住居及び各種土坑等である。ここでは、主な遺構の特徴とその出土遺物について略述することとしたい。

1号土壙

1号住居跡の床面下より検出された绳文時代中期の土壙である。直径1.07m、深さ0.27mを測る円形土壙であり、底面のほぼ中央より注口土器の完形品が検出された。注口土器は口径28cm、器高24cmの浅鉢形のもので、同器種としては県内でも古い段階に位置付けられるものである。

1号墳

台地の南緩斜面上に立地した円墳である。墳丘は径12m、高さ1.2mと小規模なものであり、内部全体は南に開口する横穴式石室である。石室は全長3.9mの袖無形で、奥壁に凝灰岩の切石、側壁には川原石が使用されたものである。検出された遺物は、石室内より直刀一振とガラス小玉4個、石室外の前庭部より土師器壺1個である。出土した土師器壺や石室の形態等から7世紀頃の築造と考えられるものである。

2号墳

1号墳の北方約25mの台地上平坦部に立地した円墳である。墳丘は径18.9m、高さ1.35mの規模を有し、内部主体は中心部に掘られた長さ2.56mと2.9mの2基の長方形土壙である。このうち第2主体部とした土壙より鉄製の鍛先が1点検出されている。また、墳丘南側斜面上からは、葬送儀礼に使用したと思われる9個の土師器壺と1個の須恵器壺がかたまって出土している。この他にも、周溝内より大・小の土坑及び柱穴と思われるピットが多数検出されている。築造時期は、出土した土器から6世紀後半代と考えられる。

住居跡

検出された9軒の竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期のものである。平面規模は1辺が7.7mの大形のもの(1号住居跡)から1辺3.5mの小形との(5号住居跡)と大小のバラツキがみられる。小形のものを除いて縦カマドを有しており、川原石などを焚口部の芯として多用しているのが特色である。また、貯藏穴内からの土器の出土例もいくつかみられる。出土遺物は土師器を中心であるが、須恵器(1号住居跡)や磁石(3号住居跡)の出土も少數ながらみられる。出土した土器等から6世紀前半代を中心とした集落と考えられ、同台地に立地する円墳群との関係が興味深い。



第1図 聖山公園道路位置図 (1:50,000)

経塙

「しうみち(城道)」と呼ばれる台地中央部を通る道沿いに 3 基ならんで立地した塙である。いずれも、径 6~7 m、高さ 1 m 強の円形塙である。このうちの真ん中に位置する 2 号経塙の頂部より経筒が出土している。経筒は銅製（鍍金の痕が一部に残る）で、高さ 10.8 cm の六角柱状を呈したものである。なお、この経筒の側面は銘文とともに「享禄二天二月吉日」の年号が刻まれている。室町時代末期のものと考えられる。

2 本年度（昭和58年度）の調査

(1) 調査計画

靈園の造成対象地区面積は約 12 ha に及ぶ広大なものである。しかし、この造成計画策定に当っては、①遺跡は極力保存するよう土の移動は最小限におさえる、②遺跡の保存状態が良好と考えられるところは緑地や広場として保存するという 2 点の方針が定められている。さらに、この対象地区内には、④既に開拓ローム層の深い部分まで現状変更が行われ遺構の壊滅が確実なところ、⑤急傾斜地で現状変更の及ばないところがある。従って、以上 4 点から実際の発掘調査対象地区面積は、造成対象地区面積の半分の約 6 ha ということとした。また、調査期間については、造成計画 10 年を先どりする形で、造成年度の少なくとも前年度までには調査を終了することを原則とし、5 カ年と定めた。

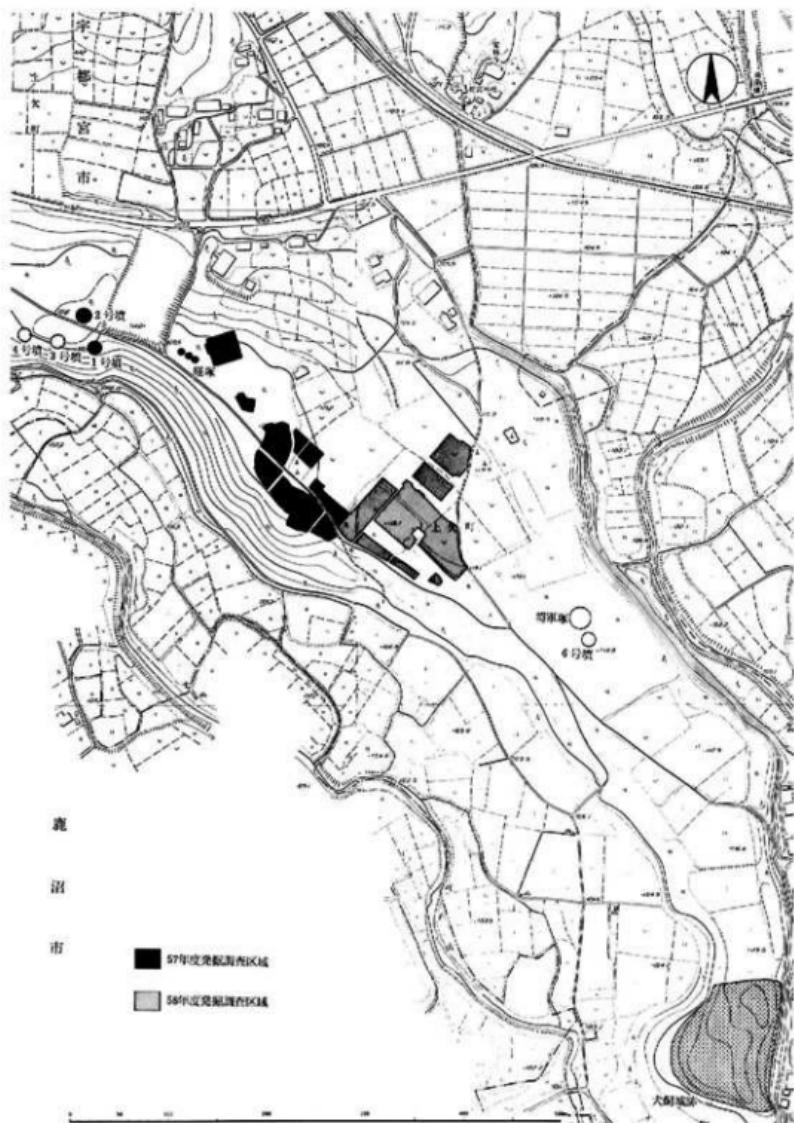
この調査 5 カ年計画の第 2 年次である本年度は、年度別造成計画の順に従って、昨年度調査地区に続く南西部約 1 ha を調査対象地区とした。なお、同地区は遺構の保存状態が良好と思われたため、当初より全面調査を行うこととした。

(2) 調査地区

今年度の調査地区は昨年度の調査地区的南西に続く約 1 ha の部分である（第 2 図参照）。同地はこの聖山公園遺跡を載せる台地のほぼ中央部であり、昨年度の調査地区同様台地上平坦部が最も広くなる（約 250 m）部分に含まれている。また、南側沖積面（水田）に至る斜面は、同地からのそれが他の部分に対してより緩やかであるという特徴もみられる。なお、平坦部の標高は 118~119 m、沖積面からの比高は 12~13 m を測る。

発掘前における同地の土地利用状況は、雑木林と畑が約半分ずつという状況であった。このうち雑木林の部分もかつて畑として利用されていたことがあったということであり、内部に数条の溝が認められた。

以上、台地全体からみた立地状況及びその後の土地利用状況等から、同地は本遺跡中でも遺構の検出とその遺存状況の良好さが最も期待できる地区とみられた。また、昨年度の調査地区で検出された住居跡群の広がり、あるいはそれらとの時期的なつながり等を明らかにすることにより、集落の様相がさらに具体的になるということも期待された。



第2図 磐山公園道路免配河市区域

(3) 調査経過

昨年度同様、調査は4月中旬から開始し、12月中旬まで行った。今年度の調査期間中の5~7月と10月に宇都宮市内の他遺跡において緊急の調査があったため、この間、本遺跡の調査が中断あるいは半減したが、それでも例年になく天候に恵まれたため、ほぼ予定した面積の調査を完了することができた。

なお、主な造構の調査期間は次の表のとおりである。

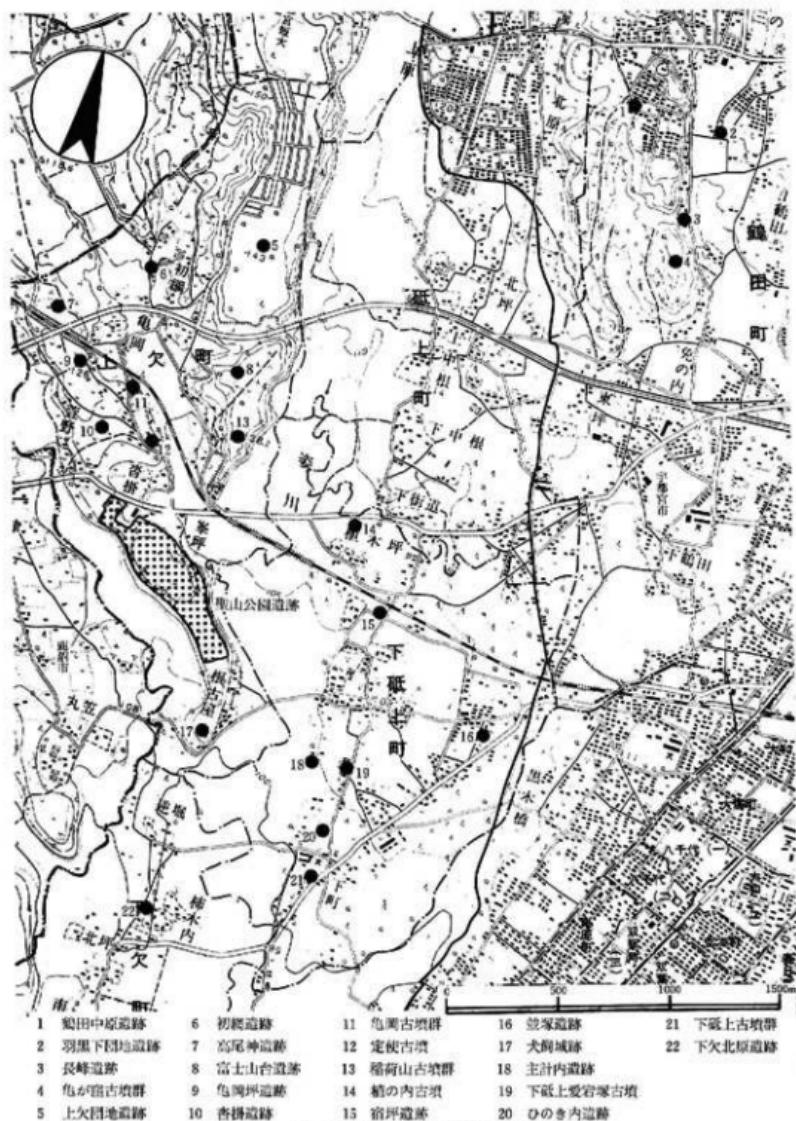
遺構名	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
10号住居跡	■■■■								
11号 "		□■■■							
12号 "		□■■■							
13号 "		■■■■							
14号 "		□		■■■■					
15号 "		□		■■■					
16号 "		□			■■■■				
17号 "		□							
18号 "		□			■■■				
19号 "		□							
20号 "		□		■■■					
6号墳					□□□				
確認調査							■■■■■■■■		
									(59年度調査地区分)
備考	%	%-x	%		%-y		男		%
	調査開始指標回数(会員)	第一回三会〇〇(名)	指導機関(会員)		第二回四会五〇(名)	第三回四会五〇(名)	第二指導機関委員会		調査終了
	開始員議見約	回数(名)	回数(名)		回数(名)	回数(名)	回数(名)		

(凡例) [] 現況測量調査

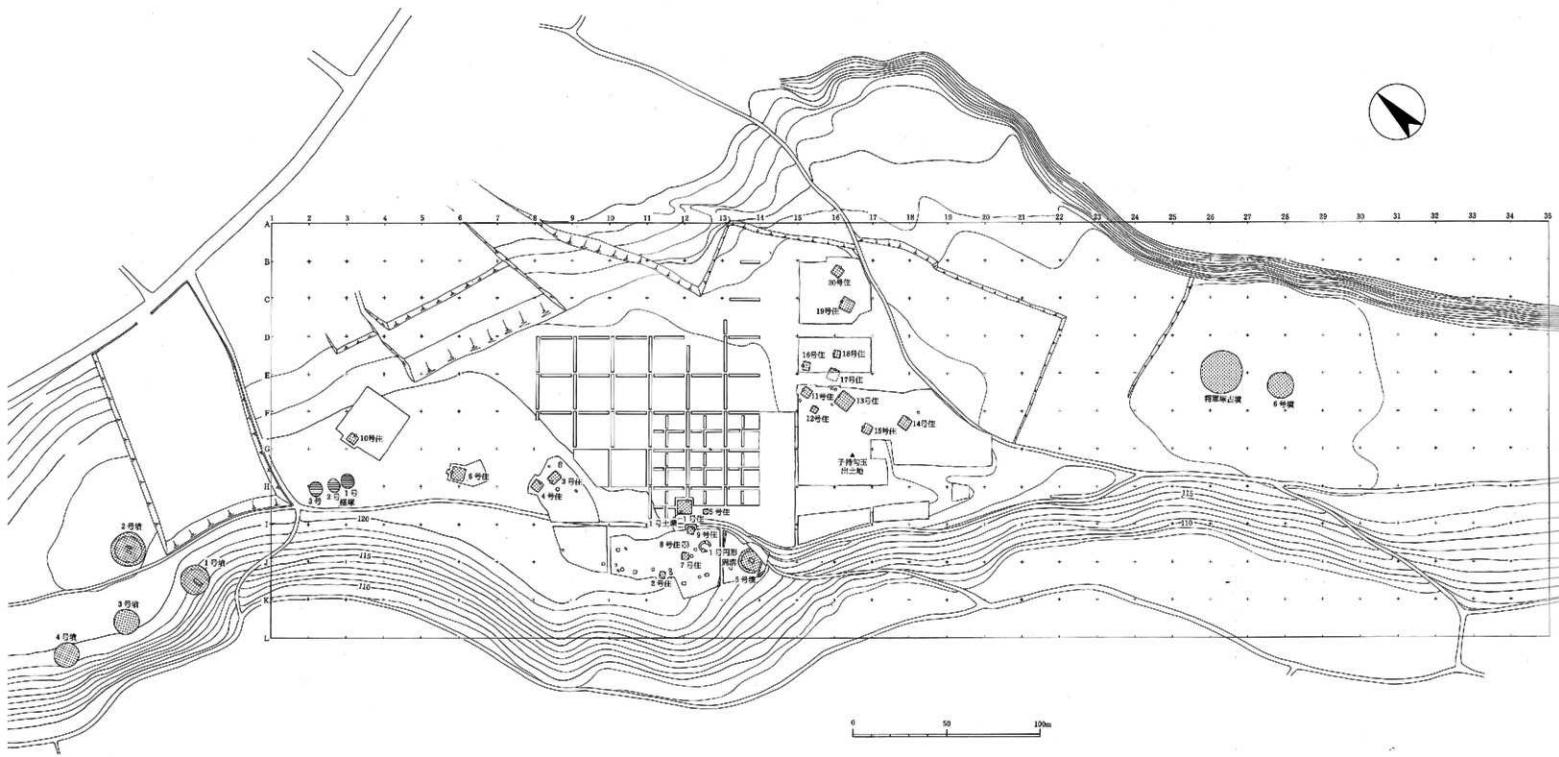
■■■■ 遺構発掘調査

□ 造構プラン確認調査

■■■■■■■■ 造構測量および写真撮影



第3図 堂山公園道路周辺遺跡分布図



第4図 黎山公園遺跡遺構配置図

II 検出された遺構と遺物

本年度の調査で検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑5基、溝状遺構数条及び円墳1基である（第4図参照）。

10軒の竪穴住居跡（11～20号住）は、台地上平坦部に集中して検出されたものである。住居跡はいずれもカマドを有するものであるが、平面規模にはバラツキが多く、昨年度検出された住居跡群（1～9号住）の在り方に類似している。住居跡からの出土遺物には多数の土器類以外に砥石等も認められる。また、住居跡外からの出土であるが、本住居跡群の付近より子持勾玉が出土している。なお、17号住居跡は遺構が特設道路にかかっているため未調査である。

土坑は、円形のもの4基、方形のものが1基である。出土遺物が極めて少ないとため、時期、性格等については不明な点があるが、いずれも住居跡群の内部あるいは周辺に位置しているのは昨年度検出された住居跡群（1～9号住）に付随したそれらと同じ様相といえる。

溝状遺構は幅2m前後のものから幅50cm程度のものと大小様々なものが、住居跡群を縦横に切る形で検出された。いずれも、住居跡群より新しい時期のものである。

なお、円墳（6号墳）は将軍塚の南側を伐採した際に確認されたものであり、墳丘測量のみを行ったものである。径約15m、高さ0.6mの小円墳である。

ここでは、上記した各種遺構のうち10号住居跡、11号住居跡、13号住居跡、14号住居跡及び子持勾玉についての報告を行うこととする。

1 住居跡と出土遺物

（1）10号住居跡

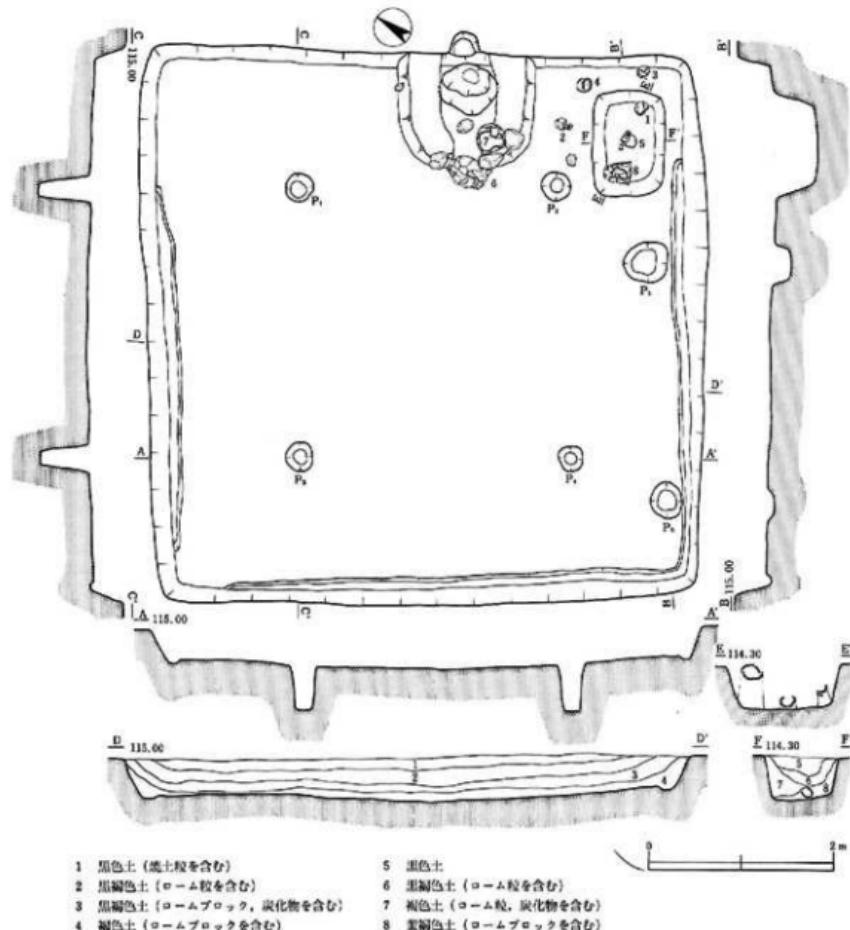
遺構（第5・6図） 本住居跡は昨年度検出された住居跡群（1～9号住）の中心部から約150m北西へ離れた地点に位置する。部分的な調査地区であったため、他の住居跡とのつながりを確認することができず、あたかも単独であるかのような状態となっている。

平面形は5.9×6.0mのほぼ正方形であるが、北辺がやや長く若干の否みがみられる。壁はローム層を切り込んで掘られており、確認面からの計測で40cm前後である。南壁及び西壁の崩落が著しく緩やかな傾斜となっているが、カマドの位置する東壁は残りが良く急な立ち上がりとなっている。

床面は4本の主柱穴に囲まれた部分がやや低く壁に行くに従って徐々に高まっている。特にカマド前面から中央部にかけてはよく踏み固められており、堅い床面となっている。

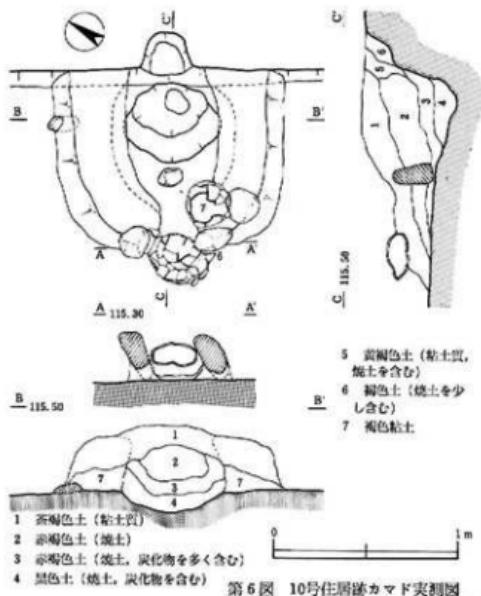
柱穴は4本の主柱穴（P₁～P₄）がほぼ住居平面の対角線上に検出されている。柱間は

約3.0 mである。また、南壁沿にはやや浅めの穴が2個検出されている。各穴の深さは次のとおりである。P₁ - 49 cm。P₂ - 50 cm。P₃ - 52 cm。P₄ - 56 cm。P₅ - 19 cm。P₆ - 9 cm。



第5図 10号住跡実測図

周溝は南・西・北壁にかけて廻っているのが検出されたが、カマドの付く東壁には認められない。幅は10~15 cm、深さ6~7 cm程度であるが、一定はしていない。



第6図 10号住居跡カマド実測図

原石の上に渡され、焚口の天井部を補強していたものとみられる。両川原石の大きさと窓の大きさから、窓部は幅、高さともに約30 cmの間口をもっていたものとみられる。煙道部は壁を20 cm程切り込んで段状にしたものである。また、煙道部の壁下には、60×45 cmの不整円形で深さ15 cm前後の掘り込みが認められる。袖部、天井部とも褐色の粘土が使用されており、川原石などが補強材として使用されたようである。なお、支脚は長さ約20 cmの細長い川原石が使用されており、その表面は赤褐色に変色している。

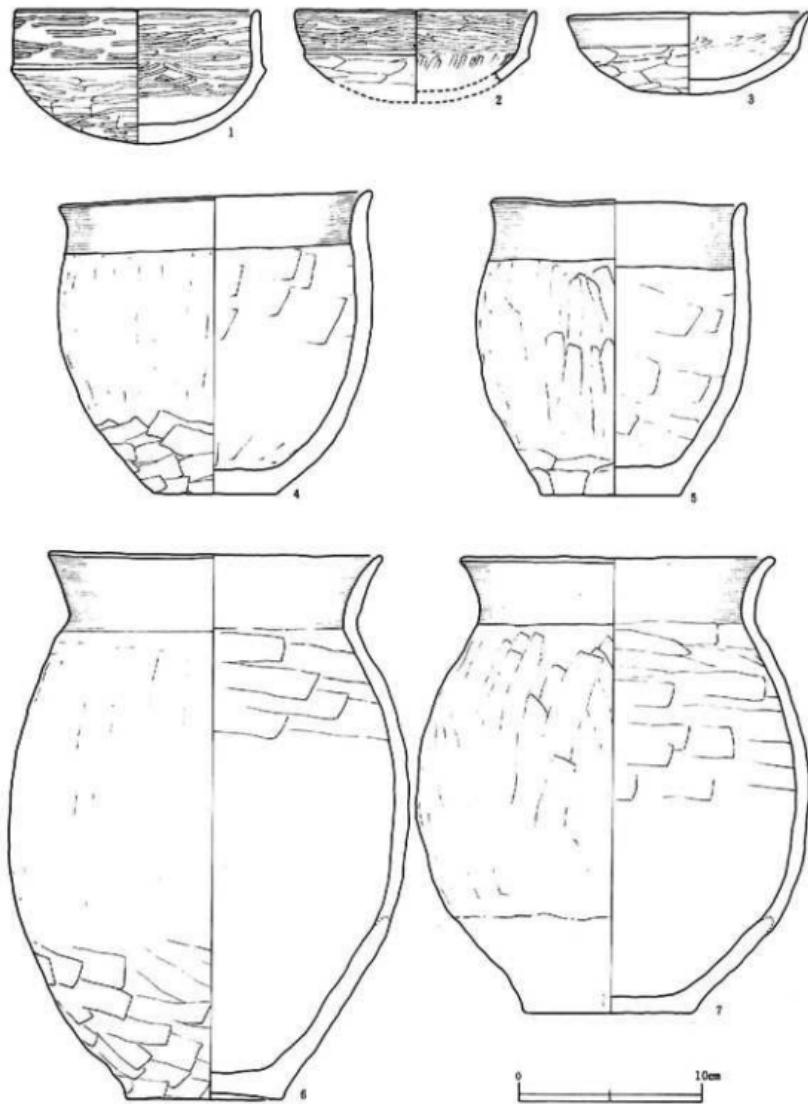
遺物(第7・8図) 本住居跡から検出された遺物は総て土師器である。土師器のほとんどはカマドと貯蔵穴及びその周辺に集中して検出されたものである。

カマドからは窓が2個検出されているが、このうち6は前記したように窓部の構築材として使用されたものと考えられる。また、7は天井部と思われる褐色粘土層に密着して出土したものである。

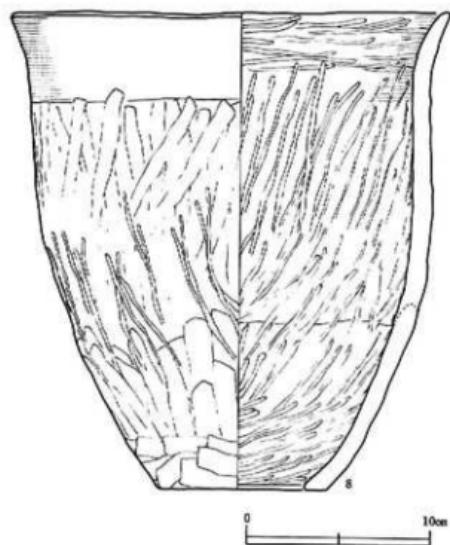
貯蔵穴からは、窓1点(1)、小型窓1点(5)と窓1点(8)が検出されている。1と5は埋土最下層(第5図8層)中より、8は上層(第5図5層)よりの出土であるが、いずれも、貯蔵穴に置かれていたものが転落した可能性が強いと思われる。

貯蔵穴はカマドに向ってすぐ右手、東南隅に位置する。1.15×0.8 mの東西に長い長方形で、床面から深さは45 cmである。埋土は住居跡のそれに近く、自然埋没である。

カマドは東壁の中央よりやや南よりに位置する。幅1.2 m、奥行約1 mの大きさで、天井部が崩落したものである。袖部の先端には2個の川原石が立てられ、窓部を補強したものとみられる。さらに2個の川原石の間に横たわって検出された土師器窓は、これらの川



第7图 10号住居跡出土遺物実測図(1)



第8図 10号住居跡出土遺物実測図(2)

11号住居跡出土土器説明表

番号	器種 (保存量)	法量	器形の特徴	調査の特徴		器質	出土位置 その他
				内面	外面		
1	土師器 杯 (完形)	13.0 7.2 ●	外面上部を直立、口縁部が膨らみ、底部が深い。	全面横位のヘラ削り。	全面横位の粗いヘラ削り。	微砂粒鉢入、茶褐色	貯蔵穴理土中。
2	土師器 杯 (2)	12.9 (5.0) ○	外部に輪を有す。口縁部は外輪。	口縁部が横位、底面が放射状のヘラ削り。	口縁部は横位のヘラ削り、底部はヘラ削り。	微砂粒鉢入、焼成良好、暗茶褐色。	床面直上。
3	土師器 杯 (完形)	12.9 4.4 ●	外面上部を内反、口縁部は外反。	口縁部は横ナデ、底面はヘラナデ。	口縁部は横ナデ、底部はヘラ削り。	小砂粒鉢入、焼成良好、黄褐色。	床面直上(塗抹面認定)。
4	土師器 器 (完形)	16.7 16.3 6.7	口縁部は僅かに外反、最大径は口縁部と底部上位。	口縁部は横ナデ、側面部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ、側面部は上・中位が横位のナデ、下位が横位のヘラ削り。	2~3 mmの砂粒鉢入、暗褐色、二次焼成を受けた。	床面直上。
5	土師器 器 (完形)	13.5 15.9 7.6	口縁部は外反気味に立ち、最大径(15.0)は底部上位。	口縁部は横ナデ、側面部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ、側面部は横位のヘラナデで、最下位が横位のヘラ削り。	3~4 mmの砂粒鉢入、暗褐色。	貯蔵穴底面直上。

6	土器 甕 (完形)	17.8 29.4 8.3	口縁部は「く」の字に外反、最大径(21.6)は胴部やや上位。底部はやや上り底。	口縁部は横ナデ。胴部は横横のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は上位が横横のナデ、下位が横のヘラナデ。	4~5 mm の砂粒混入、焼成良好、茶褐色。	カマド焚口部に構造。
7	土器 甕 (完形)	16.8 24.6 9.0	口縁部は紙く外反、最大径(21.3)は胴部中位。	口縁部は横ナデ。胴部は横横のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部は上位が横のヘラナデ。	4~5 mm の砂粒混入、褐色、一次焼成を受ける。	カマド右ソデ部上。
8	土器 甕 (完形)	23.4 25.8 9.1	口縁部は外反、最大径は口底。	口縁部は横位。胴部は斜位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ。胴部中・上位はヘラナデ、下位はヘラ削り。胴部中位に斜いヘラ跡。	2~3 mm の砂粒を含む、焼成良好、暗茶褐色。	貯蔵穴埋土上部。

(2) 11号住居跡

遺構(第9・10図) 台地上平坦のほぼ中央部に位置し、周辺には12号、13号、16号住居跡等が隣接している。標高は119 m 前後であり、南西部緩斜面へは約80 m の地点にあたる。

平面形は5.15×4.9 m のやや東西に長い方形であるが、西辺に比較して東辺が25 cm ほど長くなっている。壁はローム層を切り込んで掘られたものであるが、全体に浅く、残存状態の良い北・東壁部でも15 cm 前後、残存状態の悪い南壁部では僅か数 cm の深さである。造構確認時にやや深めに掘り下げたこともあるが、他の竪穴住居跡に比較して掘り込みが浅いことは確かである。

床面はほぼ平坦であり、全体に堅く踏み固められたものである。東壁際や、北西隅近くには炭化材が検出され、また床面上全体にも焼土や炭化物の分布が多くみられたことより焼失家屋であったことも考えられる。

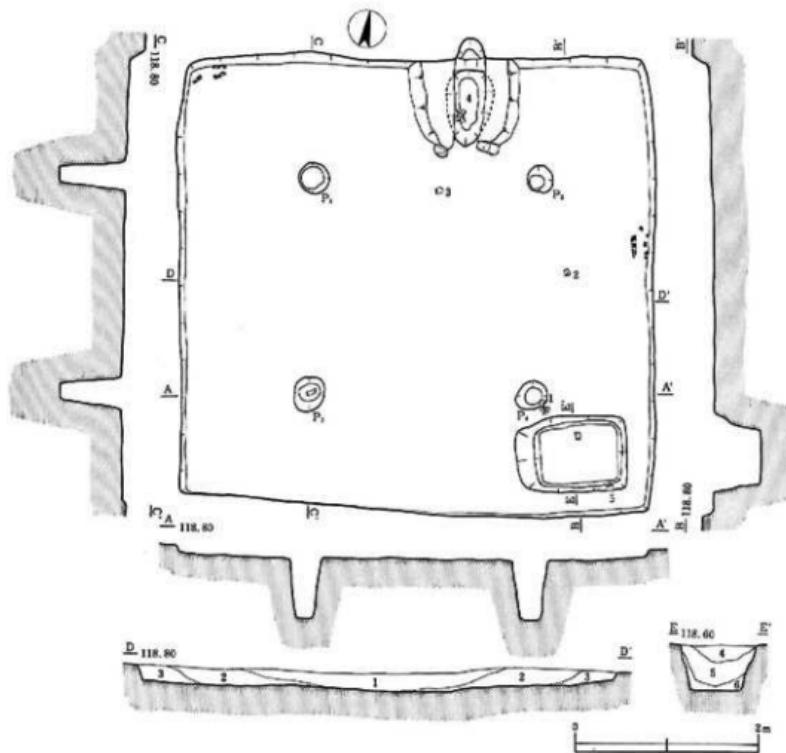
柱穴は住居平面のほぼ対角線上に4本の主柱穴が検出されている。柱間は東西2.45 m、南北2.35 m を割り、住居平面同様やや東西に長いものである。床面ではこれら4本の主柱穴以外に柱穴らしきものは検出されていない。なお、各柱穴の深さは次のとおりである。 $P_1 = 72 \text{ cm}$ 。 $P_2 = 68 \text{ cm}$ 。 $P_3 = 64 \text{ cm}$ 。 $P_4 = 63 \text{ cm}$ 。

貯蔵穴は南東隅より検出されている。壁部の崩落が著しく確認面での形はやや不整形なものであるが、底面ではきちんとした長方形となっている。大きさは105×85 cm で東西に長く、深さは底面から52 cm である。埋土は自然埋没のものであり、全体に焼土・炭化物の混入が多い。なお、住居跡内における貯蔵穴の位置としてはカマドのすぐ脇という例が本遺跡では多く、本住居跡のようにカマドから遠い位置にくる例は現在のところ他に6号住居跡1例がみられるだけである。

カマドは北壁の中央よりやや東により付設されている。幅約1 m、奥行き0.9 m であり天井部は崩壊している。両袖部の先端にはそれぞれ20 cm 前後の細長い川原石が検出されている。いずれも両方へやや傾いた状態であるが、垂直に立てられ焚口部の両脇を支えていたものとみられる。両川原石間の距離は35 cm である。煙道部は壁を約20 cm 切り込

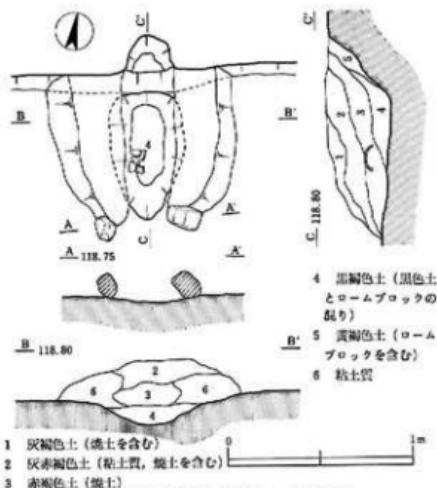
んでおり、斜めに立ち上がる中途に軽い一段を有している。燃焼部の掘り込みは70×40 cm の長方形で深さは10 cm 前後である。

遺物(第11図) 本住居跡より出土した遺物は土師器と磁石である。遺物量は少なく、実測し得たもので土師器 6 点、磁石 1 点である。1～3 の壺、5 の甕は床面直上からの出土であるが、6 の甕は覆土中(第9図 2 層)からの出土である。



- | | |
|---------------------------|------------------------|
| 1 黒色土 (ローム粒を含む) | 4 褐色土 (ローム粒、燒土を含む) |
| 2 褐色土 (小ロームブロックを含む) | 5 黑色土 (ローム粒、燒土、炭化物を含む) |
| 3 黄褐色土 (ローム粒、小ロームブロックを含む) | 6 黄褐色土 (ローム粒を含む) |

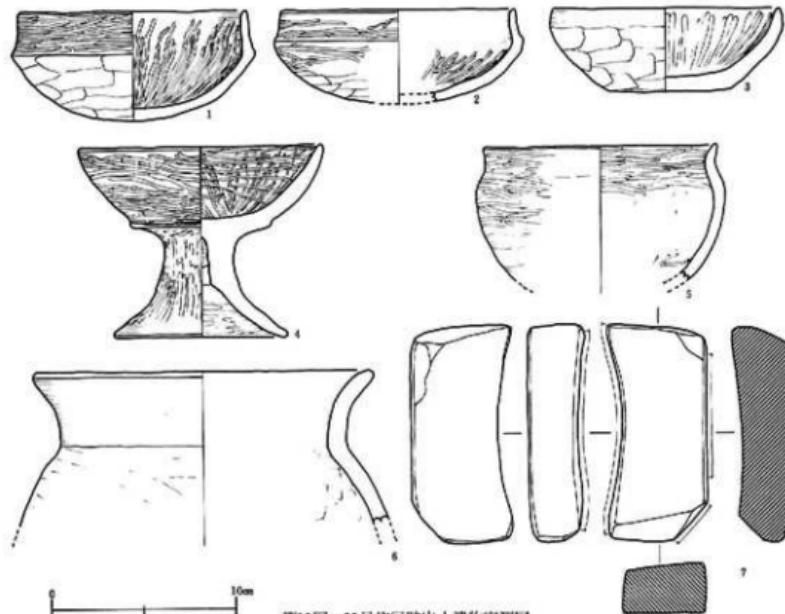
第9図 11号住居跡実測図



第10図 11号住居跡カマド実測図

4の高壺は、壺部がカマド中より脚部が貯蔵穴の埋土中層（第9図5層）より出土し、接合したものである。本例はカマド中で壺部が下向きで出土したものであり、4号住居跡、13号住居跡の例などから支脚として使用されていたものと思われる。

7の砥石はP₃中より出土したものである。底面からは50cm程度浮いており、柱穴がある程度埋没してから転落したものと考えられる。



第11図 11号住居跡出土遺物実測図

11号住居跡出土土器説明表

番号	器種 (保存量)	法量	器形の特徴	調査の特徴		器質	出土位置 その他
				内面	外面		
1	土師器 灰 (完形)	12.1 5.9 ●	外面に縁を有す。口縁部はやや内傾。	全面放射状のヘラミガキ	口縁部は横位のヘラミガキ、底部はヘラ削り。	2~3 mm の砂粒を含む、暗褐色。	床面直上。
2	土師器 灰 (残)	(12.5) (5.0) ○	外面に縁を有す。口縁部はやや内傾。	口縁部は横ナデ、底面に放射状のヘラ削き。	口縁部と体部は横位のヘラ磨き、底部はヘラ削り。	微少孔入、焼成良好、赤褐色。	床面直上、赤彩か?
3	土師器 灰 (残)	12.1 4.6 6.5	口縁部が堅かに直立、平底、厚手。	全面放射状のヘラミガキ。	口縁部は横ナデ、体部と底部はヘラ削り。	1~2 mm の砂粒入、焼成良好、褐色。	床面直上。
4	土師器 高灰 (残)	13.0 10.3 9.1	浮部外面の下位に縁を有す、厚手。	浮部は全面放射状の後体部を横位にヘラ削き、脚部は横ヘラナデ。	浮部は全面横位のヘラ磨き、脚部は横位のヘラ削き。	軽選された胎土、焼成良好、淡赤褐色。	カマド中(3回)と窓戸穴理土中の複合、赤彩か?
5	土師器 (残)	(12.5) —	口縁部は堅かく外反。	口縁部は横位のヘラ削き、体部はナデか?	全面横位のヘラ磨き。	微少孔入、内面赤褐色、外面白褐色。	床面直上。
6	土師器 灰 (残)	(18.0) — —	口縁部が堅かに直立して口縁が外反、最大径は脚部。	口縁部は横ナデ、脚部上位は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ、脚部上位は横位のナデ。	4~5 mm の砂粒混入、褐色	廻土中(2回)。

(3) 13号住居跡

遺構(第12・13図) 台地平坦面のほぼ中央部に位置し、南西部緩斜面までの距離は約80mである。周辺には11号、12号、15号、17号の各住居跡が隣接するが、それらの中心的存在となっている。

平面形は7.97×8.04 m ほぼ正方形で、全体的な形状が非常に整っている。規模的には、現在までに検出され20軒の住居跡中最も大きなものである。壁はローム層を切り込んでおり、確認面からの深さは40~50 cm を測る。壁の遺存状態もかなり良好であり、80° 近い傾斜をもって鋭く立ち上がっている。また、各コーナーもほぼ直角に整形されている。

このように本住居跡は非常に良く整備された形状をもつたものであり、後述する柱穴、周溝などの状況からみても、ある程度の設計の基に構築されたものであると考えられる。

床面は中央部が心立ちくなっているが、全体的にはほぼ平坦な面となっている。中央部からカマド前面にかけては比較的堅固な床面となっているが、その他、特に壁際はあまり踏み固められた様子がみられず柔らかである。中央部ロームブロックによる貼り床の層(第12図6層)がみられる。窓穴の掘り形は平坦面ではなく、鍋底状の浅い凹みとなっていたようである。

柱穴は住居床面のほぼ対角線上に4本の主柱穴が検出されている。柱間は東西、南北とも約4.4mの方形である。各柱穴とも掘り形の底部にさらに径10~15cm、深さ4~5cmの小ピットがみられ、この中から白色粘土が検出されている。各主柱穴の掘り形の大きさは次のとおりである。 P_1 —径42cm、深さ55cm。 P_2 —径48cm、深さ50cm。 P_3 —径48cm、深さ52cm。 P_4 —径58cm、深さ54cm。なお、カマドのほぼ正面で南壁から約1mの位置は、径35cm、深さ20cmのピット(P_5)がみられる。

周溝は幅15cm~20cm、深さ5~10cmのものが、四壁を全周する形で検出されている。両壁ではこの周溝から続いた形で、内側へ直角に延びる溝が2本検出されている。いずれも幅25~30cm、深さ11~12cmという周溝よりやや大きめな溝であり、長さは1.5mである。これは丁度 P_1 と P_3 の主柱穴を結ぶ線上まで延びた状態となっている。

貯蔵穴は北壁のカマドすぐ東側に位置する。110×80cmの東西に長い長方形であり、深さは68cmである。

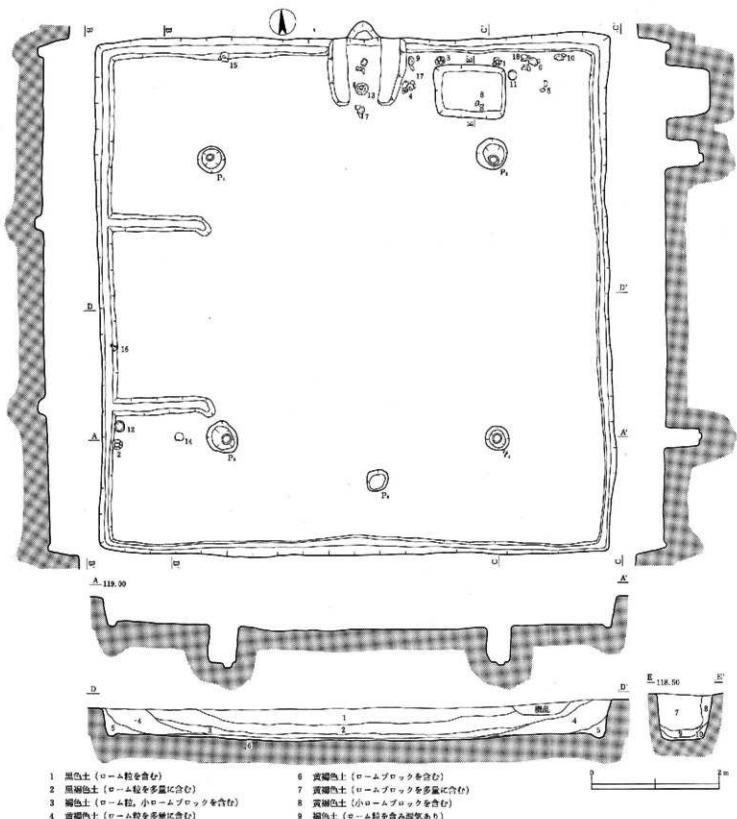
カマドは幅90cm、奥行約80cmで、天井部の崩落したものである。焚口部には特別な構築材等が検出されず、粘土で整形していたものと思われる。煙道部は壁を約20cm切り込んでおり、立ち上がりの中途には一段を有している。燃焼部には特別な盛り込みはみられず、全体が僅かに5~6cm低くなっているだけである。しかもこの部分は、ロームブロックと黒色土を混ぜた土で7~8cm程埋められている。袖部と天井部は褐色粘土を使用して構築されたものとみられる。なお、支脚としては高环を倒立させたものが使用されており、これは4号住居跡でみられる例と同じである。

遺物(第14図) 本住居跡より検出されたものは総て土器であり、実測し得たものは环12点、高环4点、甕3点である。甕は小型の17を除きいずれも破片であり、环、高环の小型品が大部分であるということが本住居跡出土土器の一つの特徴である。

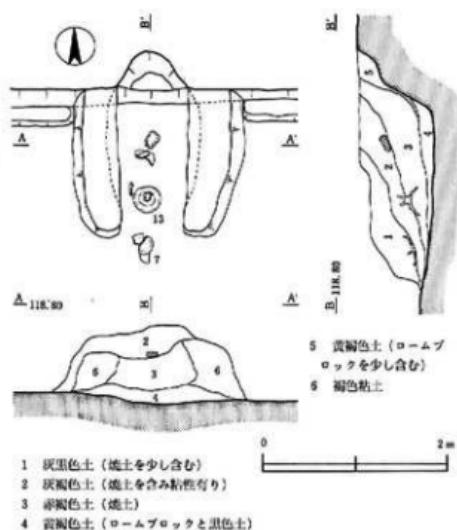
土器の出土はカマド東側の貯蔵穴周辺と西壁沿いに集中してみられる。カマド内よりは13の高环と7の环が出土している。13は前記したとおり支脚として使用されたものであり、7は焚口部に置かれていたものと思われる。

カマド及び貯蔵穴周辺の土器のうち床面直上より検出されたものは、1・3・4・5・6・9・10の环と17の小型甕である。他は覆土中の出土であり、11は覆土下層(第12図4層)、17は覆土中層(第12図2層)よりの検出である。また、8の环は貯蔵穴埋土中層からの出土である。

東壁沿いの土器は12の环が床面直上の出土である以外いずれも覆土中出土である。2の环と16の高环は覆土下層(第12図4層)、14の高环は覆土中層(第12図2層)よりの出土である。また、15の高环は床面直上の出土である。



第12図 13号住跡実測図



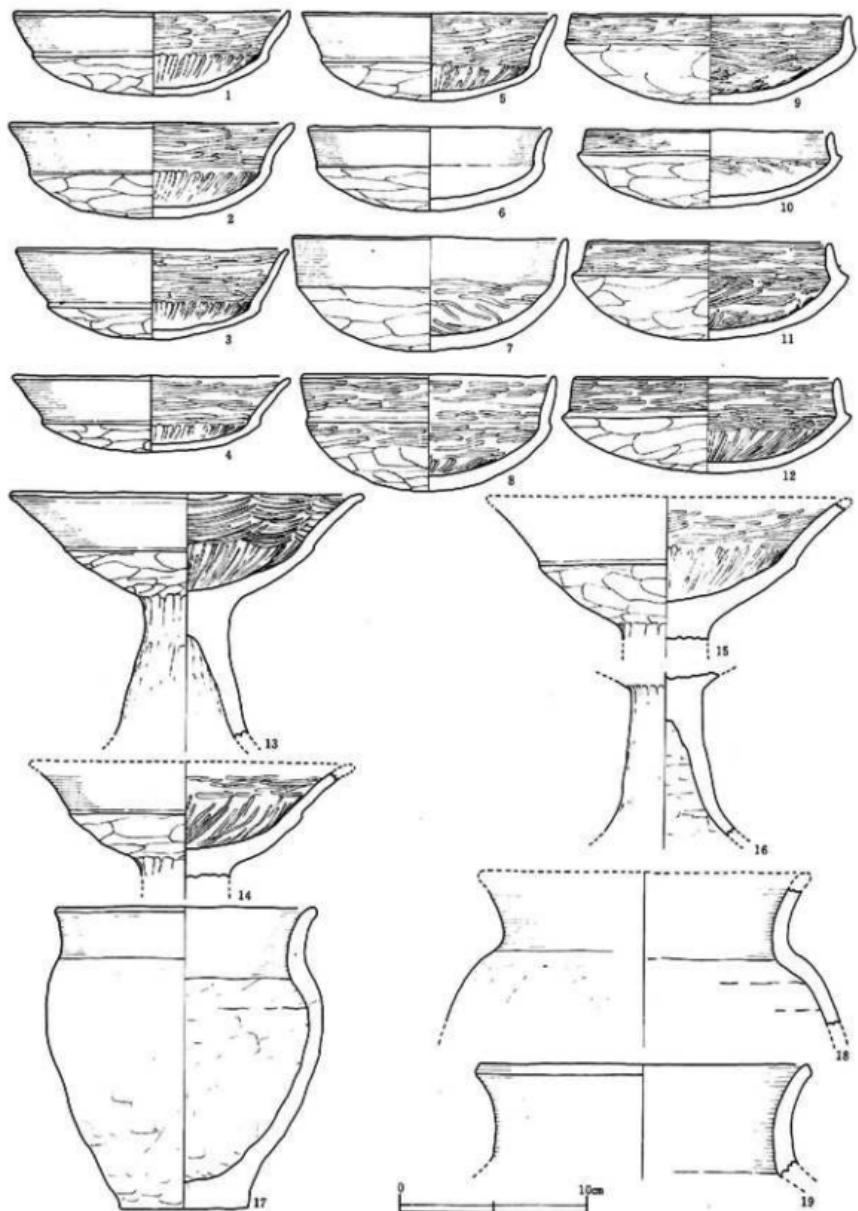
第13図 13号住居跡カマド実測図

本住居跡の出土土器の場合、覆土中のものに造存状態が比較的良好であるものが多い。これらの出土状態をみると覆土でも下層に集中している。また、壁際の場合が多いといふのも特徴であり、あるいは壁の肩部などに置かれていたものが住居の埋没とともに転落したとも考えられる。従つて、本住居跡に限って言えば、これら覆土中の土器も床面直上のものとそれほどの時間的隔たりをもたないものと考えられる。なお、各土器の器形・調整等の特徴は次表のとおりである。

13号住居跡出土土器実測図

番号	器種 (復元品)	法量	器形の特徴	調整の特徴		器質	出土位置 その他
				内面	外面		
1	土器器 底 (火)	14.5 4.5 ●	外面に縫を有す。口縫部は内面気味に外反する。	口縫部は横位。底面は放射状のヘラ剥き。	口縫部は横ナデ。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。内面及び縫部外面が褐色。	床面直上。赤彩。
2	土器器 底 (完形)	15.1 5.1 ●	外面に縫を有す。口縫部は外反。	口縫部は横位。底部は放射状のヘラ剥き。	口縫部は横ナデ。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。地成灰好。赤褐色。	覆土下層(4層)中。赤彩。
3	土器器 底 (火)	14.3 4.8 ●	外面に縫を有す。口縫部は外化。	口縫部は横位。底面は放射状のヘラ剥き。	口縫部は横ナデ。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。地成灰好。赤褐色。	床面直上。赤彩。
4	土器器 底 (火)	14.6 4.0 ●	外面に縫を有す。口縫部は外反。	口縫部は横位。底面は放射状のヘラ剥き。	口縫部は横ナデ。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。赤褐色。	床面直上。赤彩。
5	土器器 底 (完形)	12.8 4.4 ●	外面に縫を有す。口縫部は外反。	口縫部は横ナデ。底面もナデか?	口縫部は横ナデ。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。明褐色。	床面直上

7	土師器 环 (%)*	14.5 5.9 ●	外面に梗を有す。 口縁部は僅かに外傾。	口縁部は横ナデ。 底面はヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。 底部はヘラ削り。	微砂粒多量混入。 褐色。	カマド焚口部。
8	土師器 环 (%)*	13.2 6.1 ●	外面に梗を有す。口縁部は外傾。	全面ヘラ磨き。	口縁部と体部はヘラ磨き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。 焼成良好。内外品色。	野藏穴埋土中。 内外黑色處理。
9	土師器 环 (%)*	14.7 4.7 ●	外面に梗を有す。口縁部は内傾。	全面ヘラ磨き。	口縁部は横位のヘラ磨き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。 焼成良好。内外品色。	床面直上。 内外黑色處理。
10	土師器 环 (完形)	12.9 4.2 ●	外面に梗を有す。口縁部は内傾。口縁部はハリフタ。	口縁部は横ナデ。 底面はヘラ磨き。	口縁部は横位のヘラ磨き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。 褐色。	床面直上。 内外黑色處理。
11	土師器 环 (完形)	12.9 5.2 ●	外面に張り出す梗を有す。口縁部は内傾。口縁部はハリフタ。	全面ヘラ磨き。	口縁部は横位のヘラ磨き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。 焼成良好。暗褐色。	覆土下層(4層)中。底部外面に「メ」のヘラ削。
12	土師器 环 (完形)	14.1 5.1 ●	外面に張り出す梗を有す。口縁部は内傾。口縁部はハリフタ。	口縁部は横位。底面は放射状のヘラ磨き。	口縁部は横位のヘラ磨き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。 焼成良好。暗赤褐色。	床面直上。 赤色。
13	土師器 高环 (%)*	18.5 — —	环部は外面に梗を有し。口縁部は外反。脚部は欠損。	口縁部横位(透氣状)。底面放射状のヘラ磨き。脚部はナダゲ。	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。脚部は横位のヘラ磨き。	微砂粒多量混入。 淡赤褐色。 一次焼成を受けた。	カマド内。倒立させ支撑に使用。
14	土師器 高环 (%)*	(17.0) — —	环部は外面に梗を有す。脚部は欠損。	口縁部は横位。底面は放射状のヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	1~2 mm の砂粒混入。 暗茶褐色。	覆土中層(2層)中。
15	土師器 高环 (%)*	(19.0) — —	环部は外面に梗を有し。口縁部が外反。脚部は欠損。	口縁部は横位。底面は放射状のヘラ磨き。	口縁部は横ナデ。底部はヘラ削り。	1~2 mm の砂粒混入。 暗褐色。	床面直上。
16	土師器 高环 (%)*	— — —	环部欠損。脚部のみ残存。	横位のヘラ磨き。	横位のヘラ磨き。	1~2 mm の砂粒混入。 暗褐色。	覆土中(4層)。
17	土師器 高 (%)*	13.5 16.0 6.8	口縁部は低かに外反。最大径(14.8)は脚部上位。	口縁部は横ナデ。内面はヘラナデ。	口縁部は横ナデ。脚部に上半がナデ。下半がヘラ削り。底部はヘラ削り。	2~3 mm の砂粒混入。 暗褐色。	床面直上。
18	土師器 高 —	(17.5) — —	口縁部に僅かに外反。	口縁部は横ナデ。	口縁部は横ナデ。	3~4 mm 砂粒混入。 褐色。	覆土中(2層)。
19	土師器 高 —	(17.5) — —	口縁部は外反。最大径は脚部。	口縁部は横ナデ。脚部上位はナデ。	口縁部は横ナデ。脚部上位はナデ。	3~4 mm の砂粒混入。 暗褐色。	床面直上。



第14图 13号住居跡出土遺物実測図

(4) 14号住居跡

遺構（第15・16図） 本住居跡は11～13号、15号住居跡の一群から南西ふ約30m離れた地点に位置する。北東隅が一部後世の溝によって切られている以外は、良好な状態で検出されている。

本住居跡は、床面上における柱穴の切り合い及び旧周溝、旧カマド跡、旧貯蔵穴等の残存の確認により建て替えのあったことが判明したものである。新旧に分けて説明すると次のとおりである。

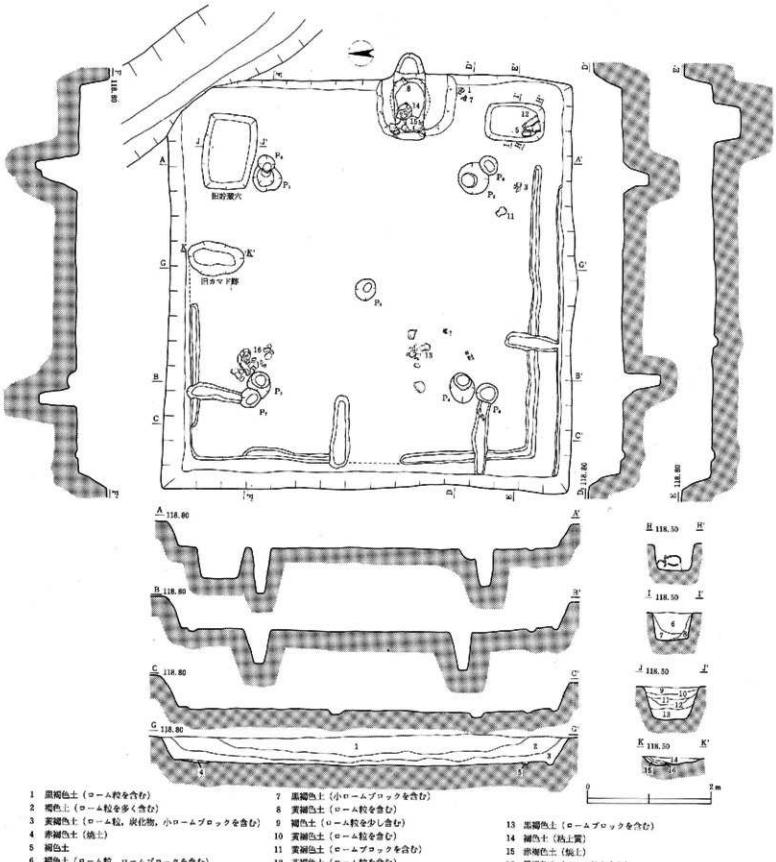
（旧住居） 新住居の南・西・北壁の内側に残る方形に走る溝が旧住居の周溝と考えられる。東辺にはこの残存周溝が検出されていないが、ほぼ方形の住居であったと想定すれば、一辺5.7mの規模であったとみられる。残存周溝は幅15cm前後、深さ4～5cmであり、建て替え時に埋め立てられている。カマドは北壁中央部に付設されていたようであり、90×65cmの長円形で深さ15cm程の掘り込みが検出されている。掘り込みの床面には焼土が残っていたが、建て替えに際しては袖・天井部ともきれいに取り除かれたようである。貯蔵穴はカマドのすぐ東に位置したものであり、130×85cmの東西に長い長方形で深さ49cmの大きさである。この貯蔵穴も建て替え時にはロームブロックを含んだ土で埋め戻されている。主柱穴はP₁～P₄の4本であり、やはり埋め戻されるとともにP₁～P₃では新住居の柱穴により切られている。それぞれの柱穴の深さは次のとおりである。P₁－45cm。P₂－43cm。P₃－58cm。P₄－62cm。なお、P₉は深さ27cmのピットであり建て替え前のものである。

（新住居） 平面形は6.5×6.55mのほぼ正方形であり、建て替え前より一回り大きくなっている。壁はローム層を切り込んで掘られており、確認面からの深さは約50cmである。南・西・北壁は崩落が著しいが、カマドが位置する東壁は遺存状態がよく、鋭どい立ち上がりを残している。

床面は建て替えにより拡張された部分が心もち高くやや段を成している以外はほぼ平坦である。周溝は南壁下に一部認められるだけであるが、13号住居跡でも検出された内側へ延びる溝がここでは4本検出されている。溝は幅25cm前後、深さ7～8cmのもので、長さはいずれも1m前後である。これらの溝の配置は、北西隅と南西隅を囲む2本が一组となっているようであり、いずれも1本は柱穴へとつながっている。柱穴は、旧住居のやや外側に4本の主柱穴が検出されている。それぞれの柱穴の深さは次のとおりである。P₅－73cm。P₆－59cm。P₇－59cm。P₈－63cm。

貯蔵穴は、カマドのすぐ南側、南東隅に位置している。130×80cmの南北に長い長方形で、深さは55cmである旧貯蔵穴より一回り小さくなっている。

カマドは東壁の中央よりやや南に付設されている。幅120cm、奥行90cmの大きさで天井部の崩落したものである。両袖部の先端に立てた川原石とこれらの上に渡した細長い



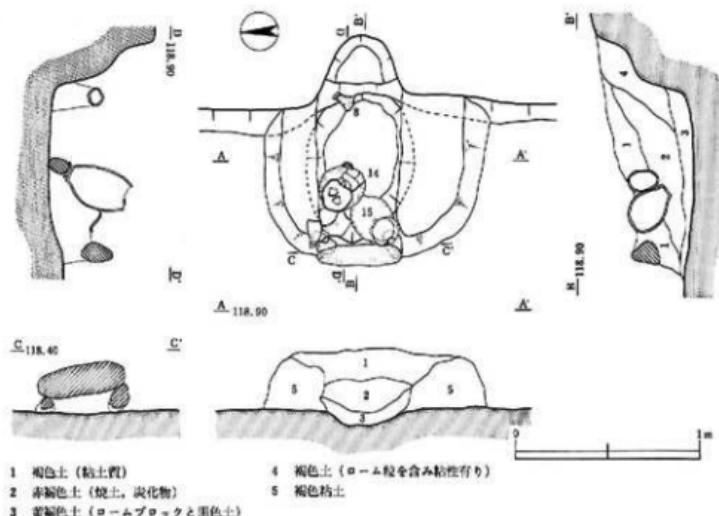
第15図 14号住居跡実測図

川原石とにより焚口部を補強したものとみられる。焚口は幅約30 cm、高さ約20 cm程の開口をもっていたものと考えられる。煙道部は壁を30 cm程切り込んでおり、立ち上りの中途中に段を有している。燃焼部には60×80 cmの長円形深さ10 cm程の切り込みがみられる。

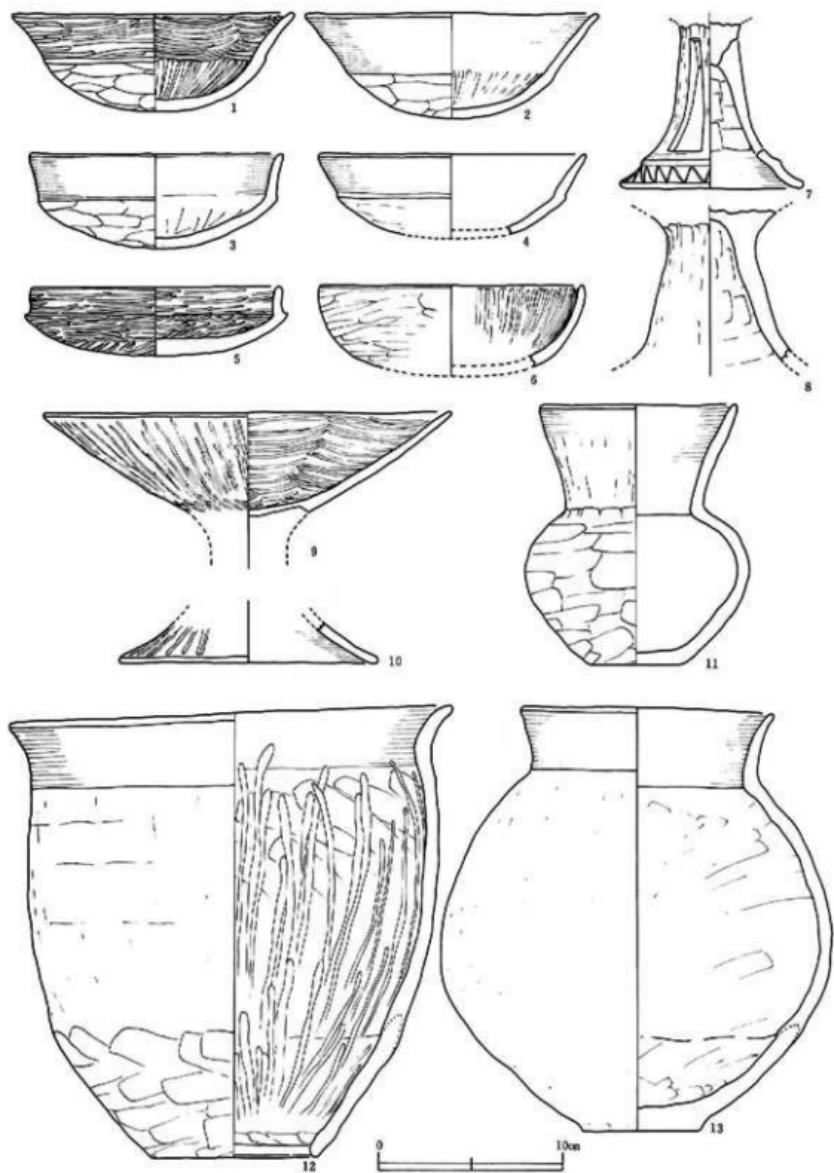
遺物(第17・18図) 本住居跡から検出された遺物は、ほとんどが土器である。カマド内よりは14・15の甕、8の高环、2の环が出土している。14は支脚に載った状態での検出であり掛け穴に掛かっていたものとみられる。また15は14に密着して横倒しになっていたものであり天井部に置かれていた可能性が考えられる。なお、支脚(18)は細長い川原石の上に甕の底部を粘土で固定し、受け部としていたものである。

貯蔵穴内よりは5の环と12の甕が出土されている。いずれも埋土下層中からの出土であるが、出土状態からみて貯蔵穴際の床面に置かれていたものが転落したものと考えられる。

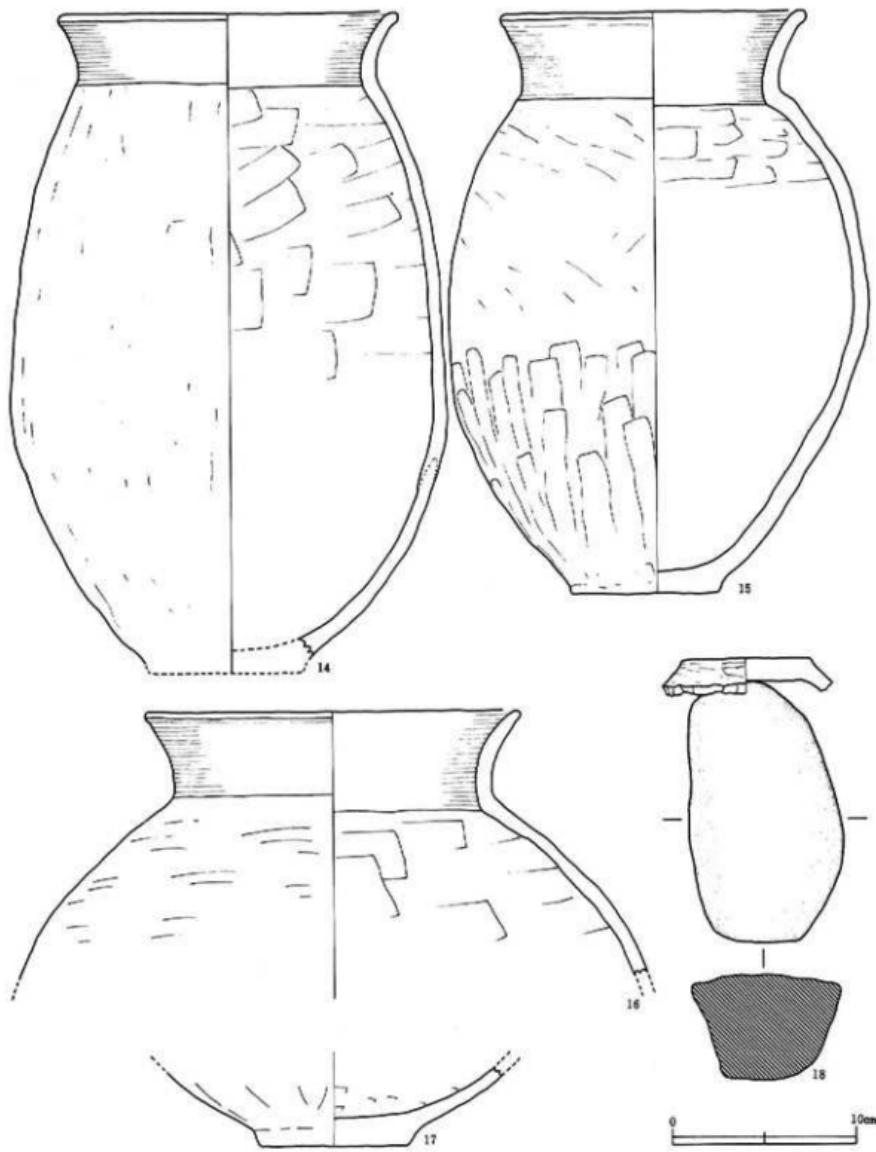
その他、床面上からは11の壺と13・16の甕が出土されている。11は完形のまま、16は小破片となっての出土である。また、1・3の环、7の高环などは覆土中からの出土であるが、いずれも最下層(第15図3層)からの出土であり、前記した土器群との時間差はあまりないものと考えられる。特に1と3はカマド右袖際からの出土であり、カマド袖部等に置かれていたものが転落した可能性も考えられる。



第16図 14号住居跡カマド実測図



第17图 14号住居跡出土遺物実測図(1)



第18図 14号住居跡出土遺物実測図(2)

14号住居跡土器説明表

番号	器種 (残存部)	法量	器形の特徴	調整の特徴		器質	出土位置 その他
				内面	外面		
1	土師器 片 (外)	15.0 5.3 ●	外面に低い壁を有す。 口縁部は外反。	口縁部は横位。底面は放射状のヘラ削き。	口底部は横位のヘラ削き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。 焼成良好。内面及び口縁外面赤褐色。	覆土下層(3層)中。 赤影。
2	土師器 片 (外)	15.6 5.8 ●	外面に低い壁を有す。 口縁部は外反。	口縁部は横位。底面は放射状のヘラ削き。	口底部は横位のヘラ削き。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。淡赤褐色。二次焼成を受ける。	カマド燃焼部中。 赤影か?
3	土師器 片 (外)	13.4 5.1 ●	外面に壁を有す。口縁部はやや外傾。口唇部内サイ。	口縁部は横ナデ。底面はヘラナデ。	口底部は横ナデ。底部はヘラ削り。	微砂粒混入。淡褐色。	覆土下層(3層)中。
4	土師器 片 (外)	(14.0) (4.5) C	外面に壁を有す。口縁部は外傾。	全面ヘラ削きか?	口縁部は横ナデ。底部はナデ。	微砂粒混入。暗赤褐色。	覆土下層(3層)中。
5	土師器 片 (完形)	13.2 3.8 ●	外面に張り出す壁を有す。口縁部は直立。口縁はハリケ。	全面ヘラ削き。	全面ヘラ削き。	微砂粒混入。黒褐色。	肝窓穴埋土下層中。内外面黒色処理。
6	土師器 片 (外)	(14.0) (5.0) C	半球形状。	全面放射状のヘラ削き。	全面横位のヘラ削り。	微砂粒混入。赤褐色。	覆土下層(3層)中。 赤影。
7	土師器 高杯 (外)	— 9.8	唇部のみ残存(高9.0cm)。三方の長方形スカリ。底部に壁を有す。	底部は横ナデ。唇部は底部のヘラナデ。	底部は底部のヘラ削き。底部は焼ナデの後、ヘラ削の鉈痕。	微砂粒混入。焼成良好。淡赤褐色。	覆土下層(3層)中。 赤影か?
8	土師器 高杯 (外)	— — —	脚柱部のみの残存(高5.5cm)。	横位のヘラナデ。	横位のヘラ削き。	1~2mmの砂粒混入。茶褐色。	カマド煙道部埋土中。
9	土師器 高杯 (外)	(21.5) —	外部のみの残存。	全面横位のヘラ削き。	全面横位のヘラ削き。	微砂粒混入。焼成良好。赤褐色。	覆土層(3層)中。 赤影。
10	土師器 高杯 (外)	— (135)	脚柱部のみの残存。	横ナデ。	ヘラ削き。	微砂粒混入。明褐色。	覆土下層(3層)中。
11	土師器 片 (完形)	10.5 14.0 5.0	口縁部は長く外傾。脚部最大径(12.2)はやや上位。	口縁部は横ナデ。内面はヘラナデ。	口縁部は横ナデ。脚部は横位のヘラ削り。底部はヘラ削り。	1~2mmの砂粒混入。暗褐色。	床面直上。
12	土師器 片 (完形)	23.4 24.2 8.6	口縁部は外反。最大径は口縁。	口縁部は横ナデ。底部は底部のヘラ削き。口底部はヘラ削り。	口縁部は横ナデ。脚部は中・上位がナデ。下位がヘラ削り。	3~4mmの砂粒混入。焼成良好。赤褐色。	肝窓穴埋土下層中。
13	土師器 片 (完形)	13.5 22.8 5.4	口縁部は低く外反。最大径(21.2)は脚部や下位。	口縁部は横ナデ。脚部はヘラナデ。	口縁部は横ナデ。脚部はナデ。底部はヘラ削り。	2~3mm砂粒混入。脚上半と口縁部赤褐色。以下は明褐色。	床面直上。 脚上半部と口縁部赤影か?

14	土師器 壺 (丸形)	17.8 35.5 8.1	口縁部は外反、最大径 (23.3) は肩部やや下位。	口縁部は横ナデ、 肩部は縦位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ、 肩部はナデか?	3~4 mm の砂 粒混入、二次焼成を受ける。培養色。	カマド支脚上。
15	土師器 壺 (丸形)	16.1 31.3 7.9	口縁部は外反、頸部外 面に横い棱を有す。最大 径(22.5) は肩部中位。	口縁部は横ナデ、 肩部上位は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ、 肩部上半がナデ、 下半がヘラナデ。 底部はヘラ削り。	3~4 mm の砂 粒混入、暗褐色で 黒斑有り。	カマド。
16	土師器 壺 (A)	(20.0) — 8.1	口縁部は外反、最大径 は肩部、底落やや突出。	口縁部は横ナデ、 肩部は横位のヘラナデ。	口縁部は横ナデ、 肩部はナデ。	3~4 mm の砂 粒混入、 褐色。	床面直上。 17号住居は同一個体。

2 子持勾玉

11~15号住居跡の一群から約20 m ほど離れたG-16グリット内より子持勾玉(第21図)が出土している(第4図参照)。出土した層位は表土下約40 cm の黒褐色土層中(ローム漸移層の上層)であり、古墳時代の竪穴住居跡が確認される面に近い。

周辺から遺構を検出することはできなかったが、土師器壺や高环の破片が比較的多く分布しており、これらは層位的に子持勾玉とはほぼ同時期のものとみられる。第19図に示したものはこれらの土師器片中より検出された手捏ね風の土師器である。1は高环、2は咲のミニチュア品とも考えられるが、1については2を載せた器台ともみることができる。

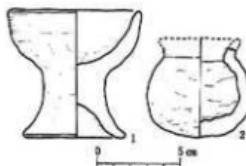
なお、子持勾玉については、次章において県内出土品等との比較を通して詳述される。

3 まとめ

以上が今年度の主な造構と出土遺物の概略である。最後に、遺物と造構の特徴点をそれぞれ示し、まとめをしたい。

(1) 出土した土師器は前年度と同様古墳時代後期に属するものである。特に13・14号住居跡などで良好な資料が出土したわけであるが、前年度の1号住居跡や3号住居跡などから出土したものと比較するとやや新しい様相がみられる。また、特殊な遺物ではあるが、14号住居跡から出土した脚部にスカシを有する土師器高环(第17図7)の出土は、該期の土師器における須恵器模倣盛行の一端を窺い知る好資料と言える。

(2) 竪穴住居の一つの特徴として、13・14号住居跡の床面で検出された内方に走る溝の存在があげられる。同種の検出例は県内でもいくつか知られ(第20図)るが、溝の条数や位置などから相当の変化形態がみられるようである。また、時期的にも古墳時代中期から奈



第19図 子持勾玉周辺出土土器



第20図 栃木県における床面に溝を有する住居跡例
(右表各文献より転載)

良時代までと長い期間にわたっている。この種の溝の形態分類や変遷さらには機能等の検討については、今後の資料の増加をまって行いたい。

(3) 昨年度検出された住居跡群(1~9号住)と今年度検出された住居跡群(11~20号住)との出土土器にみられる時間差は連続的なものであり、このことから前者から後者へという集落の変遷(移動)が想定される。また、その立地は台地縁辺部から中央部へと移ったようである。

文献

- ① 久保哲三他『椎栗山北遺跡』宇都宮市教育委員会 昭和54年。
- ② 三沢正善他『乙女不動原北浦遺跡』 小山市教育委員会 昭和57年。
- ③ 小堀時蔵他『上野原古墳群・向山根遺跡・二ヶ山遺跡』 宇都宮市教育委員会 昭和58年。
- ④ 倉田芳郎他『観音堂遺跡』『東北縱貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書』 栃木県教育委員会 昭和47年。
- ⑤ 岩上照朗・石橋知明他『宇都宮市瑞穂門田毛遺跡』 宇都宮市教育委員会 昭和53年。
- ⑥ 橋本澄朗・川原由典他『裏師寺南遺跡』 栃木県教育委員会 昭和54年。
- ⑦ 川原由典・中山晋『猿山遺跡』 栃木県教育委員会 昭和56年。

県内出土の子持勾玉について —聖山公園遺跡出土の子持勾玉を中心として—

1はじめに

栃木県立博物館 橋本澄朗

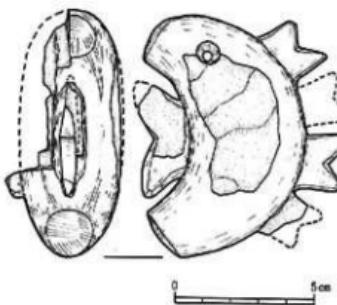
子持勾玉とは、「大型の勾玉形の背・腹及び両側面などに小型の勾玉形または小突起をいくつも付着させた形の一一種の異形勾玉」^{註1}と定義できる。古墳時代中期から後期にわたる時間のもので、祭祀または信仰上の道具と考えるのが一般的な見解である。

小稿では、当遺跡で出土した子持勾玉の報告を中心にして筆者が知り得た県内出土の子持勾玉についても触れてみたい。

2聖山公園遺跡の子持勾玉

当遺跡の子持勾玉は、G-16グリット排土作業中の表土下約30cm、黒褐色土層中から出土している。子持勾玉出土地点周辺を精査したが、勾玉に伴う遺構は発見できなかった。しかし、子持勾玉出土地点周辺の三地点より土師器が勾玉出土層位と同じ黒褐色土層より出土している点が注意を惹く。土師器の器種は、环・高环の他に埴形や高环形の手捏土器であり、手捏土器の存在は注目される。これらの土器群と子持勾玉を関連させて理解できるのが、興味のあるところである。土師器は古墳時代後期前半に位置付けることが可能である。勾玉出土地点の北側からは10軒の住居跡(11~20号住居跡)が発見されており、全て古墳時代後期前半の所産である。

次に、出土した子持勾玉についてみていきたい(第21図)。子持勾玉は割れた状態で出土しており、発見された3つの勾玉片は完全に接合する。勾玉の接合状態より細部を除外すると、勾玉は大きく4つに割れたと推定され、うち3つの勾玉片が今回発見されたことになる。ここでたいへん興味を惹く事実がある。それは勾玉の材質同定を依頼した際に割れた勾玉片の観察を通して「子持勾玉は熱を受けて割れた可能性が強い」との指摘を受けた点である。



第21図 聖山公園遺跡出土

確かに勾玉片を観察しても意図的に破碎したと推定する痕跡は認められず、前記の推定の蓋然性は高いと考えられる。とすると、從来漠然と祭祀、信仰の遺物とされてきた子持勾玉に関する祭祀行為を考える際に示唆に富む事実を提供することになるのだが……。

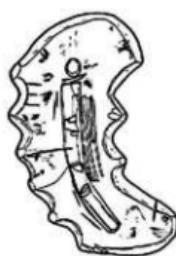
勾玉はシルト岩製であり、長径8.6 cmを測る。背に4個、腹に1個の比較的大きな勾玉形の突起を持ち、側面にも1個の突起があると推定される。端部はやや凸凹面ではあるが面取りされ、端部近くに径0.8 cmの円孔が1個穿かれている。本品は子持勾玉としてはやや小形であり、勾玉の太さや突起形状など典型的な子持勾玉と比較すると異質な印象が強い遺物である。

3 県内出土の子持勾玉

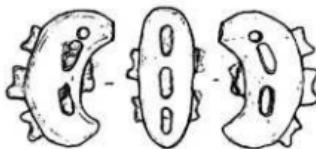
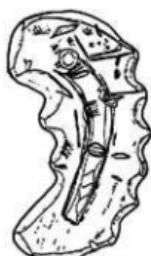
県内出土の子持勾玉について2、3の論考が公表されている¹³。しかし、論考の公表後に発見されたものや若干の見落しも見受けられることから筆者が知り得た県内出土の子持勾玉15例を示して研究の便に供したい。なお、出土地名に関しては報告された後、市町村名が変更になった場合、現在の地名と報告時の地名を併記する。

栃木県内出土子持勾玉地名表

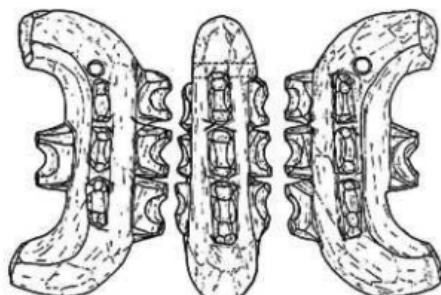
番号	出土 地(遺跡名)	遺跡の種類	伴出 遺物	備考(文献)
1	宇都宮市上吹上(荒山公園遺跡)	集落跡	土師器	
2	足利市稻生町			岩淵一夫「祭祀遺跡」『栃木県史』造史編1昭和56年
3	佐野市君田町新堀			『佐野市遺跡所在目録』昭和47年
4	小山市大字栗宮(宮内2号墳)	古墳	土師器、須恵器 円筒埴輪	鈴木一男「宮内2号墳」『栃木県埋蔵文化財保護行状報告』昭和58年
5	栃木市皆川(白山台遺跡)	祭祀遺跡	石製模造品 土師器	日向野延久「白山台遺跡」昭和51年
6	下都賀郡岩舟町静和 (下都賀郡静和村山曲ケ島小塙塚)			野沢岩藏「下野出土の子持勾玉」 『下野史蹟』第30巻第1号 昭和27年
7	鹿沼市源井 (下都賀郡北大村源井)			6同報告
8	下都賀郡壬生町小林 (下都賀郡南大村中泉字桜戸川)	祭祀遺跡?	石製模造品 大形勾玉	6同報告
9	下都賀郡壬生町羽生田			中山晋氏の佛教示 表面模様、X線撮影
10	宇都宮市西川田町 (別名御要川村西川田字黒橋)	祭祀遺跡	防衛車 勾玉 土師器	寺内武天「下野黒木精出土の子持勾玉」 『考古学』11巻4号 昭和15年
11	宇都宮市下祇上町 (河内郡要川村下祇上字不明)			6同報告
12	宇都宮市江曽島町 (河内郡桶川村江曽島字南原30)			6同報告
13	那須郡高津川町阿戸マンカイ沢			渡辺陽山「那須野の文化遺品」 『那須野の科学』 昭和28年
14	那須郡海那須町東原 (荒川村東原小郷)	古墳?	勾玉	13時報告
15	栃木県内出土(土製子持勾玉)		土	佐野大和「子持勾玉」『神道考古学講座』第三卷 原始神道二 昭和56年



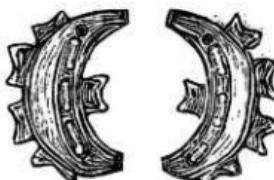
1 足利市相生町出土（地名表2）



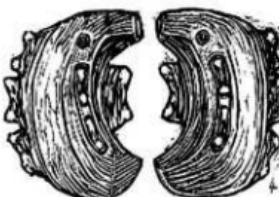
4 栃木市（白山台遺跡）出土（地名表5）



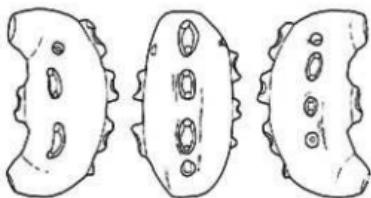
2 小山市大字要宮（宮内2号墳）出土（地名表4）



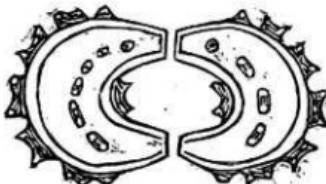
5 下都賀郡壬生町小林出土（地名表8、全長は不明）



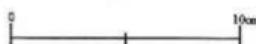
6 宇都宮市下祇上町出土（地名表11、全長は15cm）



3 鴨谷郡高連川町上河戸マンカイ岡出土（地名表13）

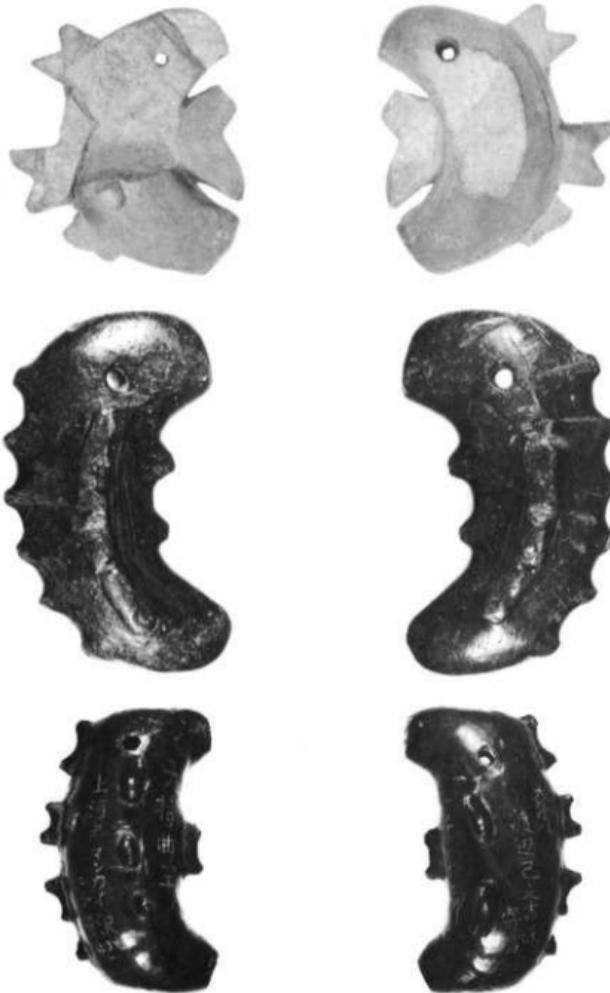


7 宇都宮市江首島町出土（地名表12、全長は14cm）



第21図 栃木県内出土子持勾玉集成図

（1～4については縮尺どおり、5～7については
縮尺が不統一。また、1、2、4～7については
地質名表中の各文献より掲載）



上 宇都宮市上久町(塙山公園遺跡)出土(地名表1)

中 足利市相生町出土(地名表2)

下 塩谷郡喜連川町上河戸マンカイ沢出土(地名表13)

以上の15例が、現在筆者が知り得た県内出土子持勾玉の事例である。今後とも追加、補正していくたいと考えているので、先輩諸氏の御教示をお願いしたい。

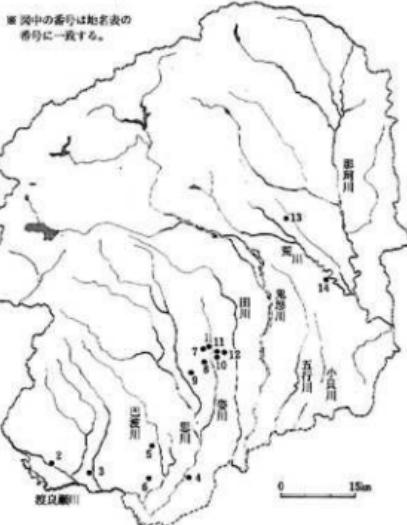
地名表作成過程で気付いた点を二点ほど記したい。まず、事実関係の訂正である。地名表13の喜連川町マンカイ沢出土例は從来の大田原カイカ沢とかマイカイ沢と記されている。これは誤りであり、喜連川町上河戸マンカイ沢である。マンカイ沢の入口手前に土器散布地があり、子持勾玉の出土する可能性は十分想定できる。

次に、子持勾玉の出土事例が宇都宮市南西地区から壬生町北部に7例と集中するところである(第22図参照)。もっと厳密に言えば、姿川、黒川流域に集中するという事である。本地域が古墳時代中期後半から後期にかけて県内他地域に対し卓越した力を持つようになる事実と関連して考えると興味深い。

4 結びにかえて

当道跡より出土した子持勾玉及び県内出土例を検討する中で二、三の興味深い問題に気付いた点を記し、小稿の結びと共に筆者の今後の検討課題を明示しておきたい。

- (1) 聖山公園遺跡での子持勾玉は火を受けて割れた可能性が強い。それが子持勾玉に関する祭祀行為とどのように関連するのか。
- (2) 本遺跡の集落形成は6世紀前後に開始されるが、ほぼ同時期の權現山北遺跡では多くの石製模造品が発見されている。しかし、本遺跡では現在のところ石製模造品は発見されていない。それが祭祀形態の相異に起因するのか、また子持勾玉の出土とどう関連するのか、今後の検討課題である。
- (3) 黒川、姿川流域に子持勾玉が集中する事実が、該地域の古墳文化の卓越性と関連づけて説明できるのではないか。古墳時代の中期後半から後期にかけての本県古墳文化の地



第22図 栃木県内出土子持勾玉分布図

域的展開と関連させて検討すべき問題であろう。

最後に、小稿を作成するにあたり、種々御配慮いただいた宇都宮市教育委員会 定岡明義、栃木謙の両氏、また資料作成に御協力いただいた栃木県立博物館 上野修一氏と栃木県文化振興事業団 藤田典男氏に深甚なる謝意を表します。

註1. 佐野大和・乙益重隆 「神道考古学用言解説」「神道考古学講座」 第一巻 前期神道 昭和56年

註2. 栃木県立博物館 学芸部長提携昇先生によればこの子持勾玉の断面には、熱による変色が観察できるとの御指摘であった。なお、調査指導に来訪した時点で大川清先生も同様な可能性を示唆しておられた事を記憶している。

註3. 野沢岩藏 「下野出土の子持勾玉」「下野史談」第30巻第1号 昭和27年。樋山林繩 「祭祀遺跡地名表」関東編一 「神道考古学講座」 第一巻 神道前期 昭和56年。岩渕一夫 「祭祀遺跡」「栃木県史」通史編一 昭和56年。野沢氏の論文では6例、樋山氏の地名表では3例、岩渕氏の一覧では5例の子持勾玉の出土例が報告されている。

図 版



(1) 11~13・15号住居跡遠景



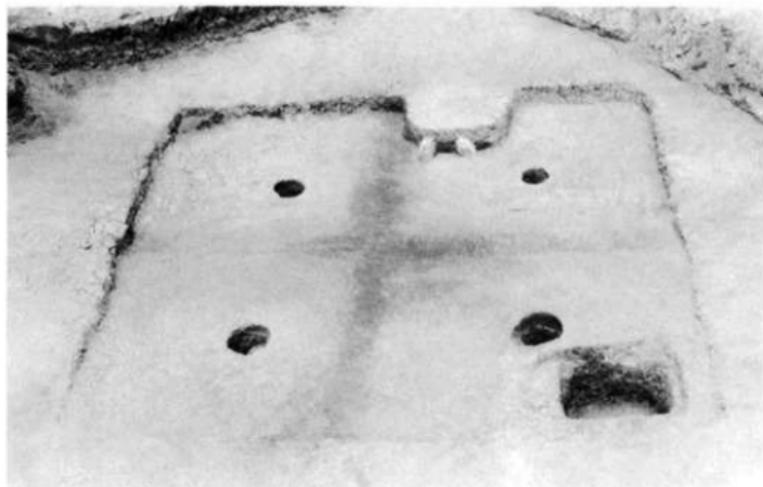
(2) 10号住居跡全景（南西から）



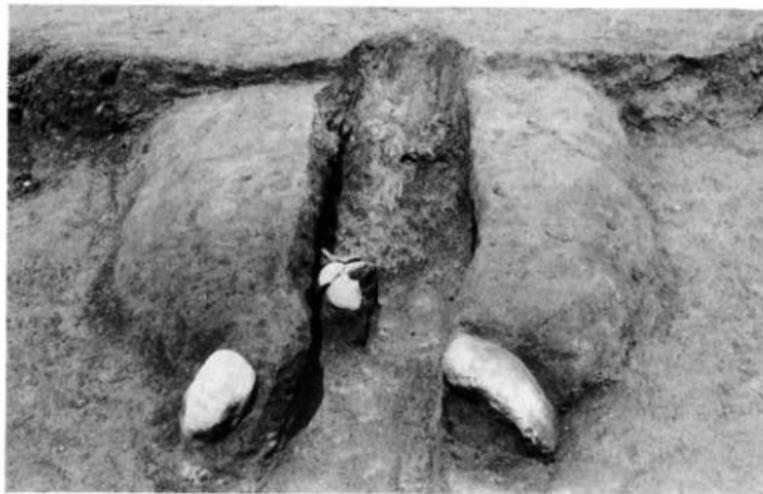
(1) 10号住居跡貯藏穴 (南西から)



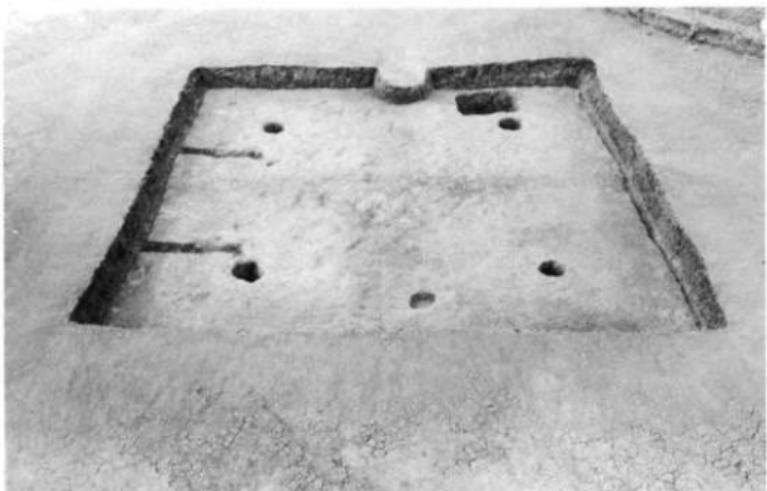
(2) 10号住居跡カマド (南西から)



(1) 11号住居跡全景 (南から)



(2) 11号住居跡カマド (南から)



(1) 13号住居跡全景 (南から)



(2) 13号住居跡カマド (南東から)



(1) 14号住居跡全景 (南東から)



(2) 14号住居跡貯蔵穴 (北西から)



(1) 14号住居跡カマド (南東から)



(2) 14号住居跡カマド支脚 (左 北西から、右 西から)



10号住-6



14号住-15



10号住-5



10号住-4

住居跡出土土器 (1)



10号住-7



14号住-13



10号住-8



14号住-12

住居跡出土土器（2）



11号住-4



13号住-13



14号住-11



14号住-7



10号住-2



10号住-3

住居跡出土土器 (3)



10号住 - 1



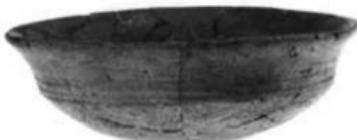
11号住 - 5



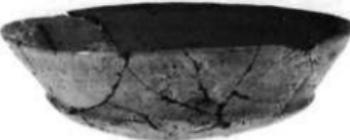
11号住 - 1



13号住 - 8



13号住 - 2



13号住 - 1



13号住 - 5

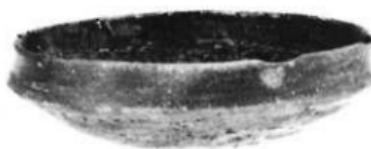


13号住 - 4

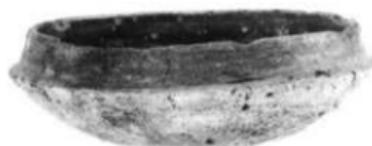
住居跡出土土器 (4)



13号住-7



13号住-9



13号住-11



13号住-12



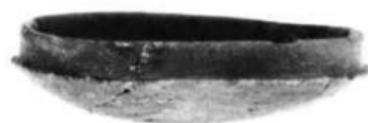
13号住-10



14号住-1



14号住-3



14号住-5

住居跡出土土器（5）

宇都宮市埋蔵文化財調査報告第14集

聖山公園遺跡Ⅱ

昭和59年3月発行

発行 宇都宮市教育委員会社会教育課

(宇都宮市中央1-1-13)

TEL (0286)37-2111

印刷 勝松井ビ・テ・オ印刷

(宇都宮市平出町4287-7)

TEL (0286)62-2511
